

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370028

研究課題名(和文) 異文化理解へ向けての「間の解釈学」の構築

研究課題名(英文) Construction of hermeneutics of 'between' for the cross-cultural understanding

研究代表者

星野 勉 (HOSHINO, Tsutomu)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：90114636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：異文化間を橋渡しする共通の尺度といったものがあるわけではない。日本の場合、古来より外来文化を受容してきたが、そのさい重要な役割を果たしたのが「翻訳」である。それには二つの側面がある。一つは意味の置換であり、もう一つは意味の創造である。「翻訳」は、異なる言語間に一対一対応の等価な意味を見出そうとする試みである。だが、現実には元の意味の忠実なコピーであることはありえず、元の原文と翻訳文との間には意味のズレが生じる。しかし、このズレが新しい意味をもたらす。「翻訳」に見られる、意味の等価性と創造的なズレ、ここに同一の準拠枠内ではなく、異なる準拠枠間での解釈学の可能性を探るための手掛かりがある。

研究成果の概要(英文)：There is no such thing as a common standard mediating between different cultures in "cross-cultural understanding". Japan has been receptive to foreign cultures from ancient times. In receiving them, "translation" played an important role. It has two aspects. One is a replacement of meaning and the other is a creation of meaning. At first "translation" is an attempt, in which we are going to find an same meaning between different languages while counting on some kind of identity between them. But it brings about a gap in meaning between the original sentence and the translated sentence. The latter cannot be a faithful copy of the former. However this gap brings a new meaning. Both equivalence of meaning as an ideal, which should be aimed at in "translation", and the creative gap give us a clue to investigate a possibility of hermeneutics between the different frameworks.

研究分野：倫理学

キーワード：解釈学 異文化理解 風土 翻訳

1. 研究開始当初の背景

「解釈学」の語源は、「解釈する」を意味するギリシア語 *hermeneuein* で、もともと古代ギリシアで文献学の補助学として成立した。以後、テキスト解釈の技術として、古典解釈学、法解釈学、聖書解釈学など領域別に発達してきた。「解釈」とは過去のテキストと現在の読者との間にある文化的、歴史的距離をのりこえる作業である。

伝統的に解釈学は「解釈(interpretation)」と「適用(application)」の二つの契機を含むとされる。過去のテキストを解釈することは、それを現在にいか「適用」するかの問題に結びつかねばならない。その意味で聖書釈義は、中世以来解釈学のモデルとなってきた。解釈者はテキストから生きた信仰のメッセージをひきださねばならないからである。

多様な解釈を統一する「理解」の一般理論を探求することによって、それまでの領域別解釈学を一般解釈学に普遍化しようとする動きは、19世紀にシュライエルマハー(F.E.D. Schleiermacher)によって開始された。シュライエルマハーは、聖書釈義学と古典文献学の両方の解釈技法を整合することに努めた。解釈にあたってテキストと著者のどちらを重視するかは、つねに解釈学上の難問であるが、彼も両者の統合に苦しみ、晩年は「著者が自己了解する以上に著者を了解する」という有名なスローガンに表されるように、ロマン主義的傾向を強めた。

彼の企図や課題はデイルタイ(W. Dilthey)に受け継がれ、解釈学的哲学に発展する。折からドイツ史学興隆の時期で、デイルタイにとり、歴史の文献や史料は「生の表現」であり、歴史学は記号を通して他者の生を了解するものである。彼は自然科学の科学性に匹敵するものを「精神科学」にも与えようとした。そして自然科学的認識の特質が「説明」であるなら、歴史的認識を範型とする精神科学の認識論的性質は「理解」であると、理解の技術学として解釈学を構想した。つまり解釈学は精神科学の基礎づけの役割を担うものである。こうして、哲学することが解釈学となる解釈学的哲学への道を踏みだしたが、同時に前述の難問も深刻化した。すなわち、記号の解釈を通して、いかにして他者の生を理解するか、である。

ハイデッガー(M. Heidegger)は《存在と時間》(1927)において、理解・了解の認識論を理解・了解の存在論に転回することによって、この論理的難点(アポリア)を克服しようとした。そこで展開される基礎的存在論とは、「存在を了解しつつ存在する」現存在(人間)の存在解釈学なのである。また「世界内存在」という概念で、了解を他者でなく「世界」と関係づけた。こうして了解を存在論化、世界化することにより、ハイデッガーは解釈学を精神科学の基盤にすえた。これが同時代の哲学に与えた影響は大きい。しかし、ハイデッガーは人間の存在様態の言語性を強調する

ことによって、解釈学をテキスト解釈から遠ざけてしまった。

20世紀後半の解釈学はそのアポリア克服を課題としている。その代表としてガダマー(H.-G. Gadamer)の『真理と方法 哲学的解釈学要綱』(1960)が挙げられる。彼は自然科学の「方法」に、人文科学の「真理」を対置して、デイルタイの課題を継承する。またハイデッガーの存在論的解釈学の延長上に、テキスト解釈へ還帰することを可能ならしめる解釈理論を探求する。彼は、歴史的了解は意味の地平と解釈者の地平が融合することであり、テキスト解釈は問いと答えの弁証法的関係であるとして、言語中心的、存在論的、弁証法的解釈学を確立した。

しかし、ガダマーに代表される、従来の「解釈学」は、歴史、伝統を解釈の可能性の大前提とするものであった。言い換えれば、それが問題としたのは、同一の文化的な準拠枠内での、過去のテキストの解釈の問題であった。しかし、とすれば、同一文化内ではなく、異なる文化間、異なる準拠枠間での相互理解、異文化理解は、どうなるのかという疑問が当然頭をもたげてくる。本研究は、この疑問を主要な背景としている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、端的に言えば、同一文化内ではなく、異なる文化間での、言い換えれば、異なる準拠枠間での「解釈学」の可能性を探求することである。

ところで、まず言うことは、異文化間を橋渡しする共通の尺度といったものがあらかじめ用意されているわけではない。異文化との出会い、接触は様々であり、異文化の理解、受容も様々な仕方になされる。しかし、そのなかでも「翻訳」は異文化を理解し受容するにあたってきわめて重要な役割を果たしてきたし、いまま果たしている。つまり、文化転移がなされるのは、「翻訳」を通じてである。そこで、「翻訳」という事実に着目し、「翻訳」において認められる意味の置換と意味の創造、すなわち、意味の等価性と意味の創造的なズレを手掛かりとして、同一の準拠枠内ではなく、異なる準拠枠間での「解釈学」、つまり「間の解釈学」の可能性を探求することとする。

そのさい、哲学、倫理学という守備範囲を超えて、文化人類学、地理学の研究成果も取り入れることとする。同時に、外国の日本文化研究者との異文化対話を通じて、異文化理解、異文化間対話という現実的な課題を、身をもって実践することをも目的とする。

3. 研究の方法

一方で、「翻訳」による文化転移という事態において起こっていることを、従来の「解釈学」の方法でもって解明する。と同時に、他方で、それによって解明できたこと、解明できなかったことを精査することによって、

従来の「解釈学」の枠組みを、同一の文化的準拠枠内での「解釈学」から、異なる文化的準拠枠間での「解釈学」、すなわち、「間の解釈学」の枠組みへと組み替えるという、方法を採用する。それはまた、「翻訳」の可能性と不可能性の問題を探究するなかから「間の解釈学」の可能性を探るものである。

4. 研究成果

(1) 「翻訳」から「異文化理解」へ

「異文化理解」といっても、そこに異なった文化間を橋渡しするような共通の尺度といったものがあるわけではない。日本の場合、江戸時代以前は中国大陆、朝鮮半島から、明治維新以降は欧米から、先進的な文化を受容してきたが、そのさいきわめて重要な役割を果たしてきたのが「翻訳」である。それには二つの側面がある。一つは意味の置換であり、もう一つは意味の創造である。「翻訳」は、まずは、言語・文化間の何らかの同一性を当てにしながら、異なる言語・文化間に一対一対応の等価な意味を見出そうとする試みである。しかし、現実には、元の意味の忠実なコピーであることはありえず、元の原文と翻訳文の間には意味のズレが生じる。しかし、このズレが新しい意味をもたらすのである。「翻訳」に見られる、目指されるべき理念としての意味の等価性と創造的なズレ、ここに同一の準拠枠内ではなく、異なる準拠枠間での解釈学の可能性を探るための手掛かりが認められる。

(2) 「翻訳」における意味の置換と創造

第一に、意味の置換という観点から「翻訳」の問題を取り上げる。この観点から定義すると、「翻訳」とは、異言語・異文化間に「翻訳不可能」と思われる差異が厳然として存在するかもしれないにもかかわらず、言語・文化間の何らかの同一性を当てにしながら、相互の言語・文化間に一対一対応の等価な意味を見出すことにほかならない。そのさい、翻訳は、それが意味の置き換えであるかぎり、あくまでも意味の等価性を目指している。それゆえ、「翻訳」については、その良し悪しが、どれだけ原語・原文の意味を正確に置き換えることができているか、言い換えると、どれだけ原語・原文の意味を忠実に模写することができるか、という観点から評価される。

ただし、置換における意味の等価性は、あくまでも目指されるべき理念であって、現実の「翻訳」がそれを実現しているということではない。現実には、「翻訳」がもとの意味の忠実な複写（コピー）であることはありえず、翻訳語・翻訳文と原語・原文の間には意味のズレが、つまり、いわゆる誤訳が付きものである。すなわち、イタリアの哲学者、ベネディット・クロウチェ（1866-1952）が言うように、「どんな翻訳も裏切りのようなものである（Traduttore-traditore）」。

第二に、翻訳とは、原語・原文と翻訳語・翻訳文のもともともっていた意味とは違った意味を創造することである、と定義することができる。

翻訳において、理念的には、原語・原文と等価なものを翻訳言語内に置き換えることが目指されている。しかし、優れた翻訳であっても、置き換えられたものがもとのものと意味の上でまったく等価であるということはありません。原語・原文と翻訳語・翻訳文の間には意味のズレが伴う。しかも、この意味のズレは、原語・原文と翻訳語・翻訳文の間だけでなく、翻訳言語内にもまた生じる。その限りで、翻訳とは、翻訳言語内に、原語・原文と翻訳語・翻訳文のもともともっていた意味とはちがった意味を創造することであると定義することができる。

(3) 「哲学」の事例

「philosophy」という西洋語は、「philosophia」、すなわち「知（sophia）」を「愛する（philos）」ことに由来するが、明治初期、西周（1829-97）は、「士希賢（士は賢を希う）」という漢文からヒントを得て、「哲智すなわち明らかな智を希求する学」という意味の「希哲学」ということばを創造したが、後にこれを「哲学」と改めた。

「philosophy」に対応するものが当時の日本にまったくなかったかと言えば、必ずしもそうではない。それに当たるものとして、朱子学を挙げることができる。しかし、啓蒙思想家でもあった西周にとって、「philosophy」は旧来の学問体系である朱子学に取って代わるものでなくてはならなかった。『百一新論』において彼は、百の教えを一つに統合する原理を把握する「philosophy」が学問の中核として求められねばならないと説いているが、それは「philosophy」に対応する学問が新規に創出されなければならないということの意味している。

また、「philosophy」が「哲学」ということばに翻訳されることによって、もとの「philosophy」の意味から微妙にずらされてもいる。西周自身は、コントの実証哲学の影響下においてではあれ、「philosophy」の意味を正確に理解していて、哲学には「学の蘊奥を究める」ことが必要であるとも説いている。

しかし、「哲学」という翻訳語は、既存の知の体系を批判し、より深い知を希求していくという意味での「希」の字を削ぎ落とすことによって、出来合いの知の体系を学ぶことであるというように誤解されやすくなった。事実、日本の近現代の哲学者の多くは、西洋の哲学の受容と紹介に明け暮れていた。したがって、翻訳語の「哲学」は英語の「philosophy」のもとの意味を忠実に表現するものと言い切ることはできない。日本にも西洋にもそれにぴったりと対応するものがないという意味では、翻訳語「哲学」が表現

しようとしたものは一つの「虚構(フィクション)」である。

ところが、この「哲学」という翻訳語が世間に広まっていくのに応じて、この「虚構(フィクション)」に合わせて現実が造り出されていった。その意味で、創造は言葉の上だけのことには止まらない。実際、明治以降の日本では、「哲学」が、西洋の哲学や思想の旺盛な受容を通じて、一つの学問領域として確立されていった。それが、西洋の哲学の受容と紹介に明け暮れるものであったとしても、そのかぎりにおいてまた西洋の「philosophy」として非なるものであったとしても、そうなのである。そして、明治以降の日本の「近代化」とはまさしくそのようなものであった。

(4) 和辻哲郎の「風土」概念

和辻哲郎の「風土」概念は、ドイツの哲学者ヘルダー(J.G.v.Herder)の「風土(Klima)」、ハイデガー(M. Heidegger)の「世界(Welt)」という概念からヒントをえた「翻訳」概念であるが、それを扱った著書『風土』で採用された比較文化論的な視点とも相まって、一方で、あくまでもローカルな「日常直接の事実」を出発点としながらも、他方で、そこでの人間と自然とのかけわりの汎通的な構造を示唆している点で、ローカルで特殊な文化をグローバルな文脈で問題にすることを可能としている。その意味で、「風土」概念は、異文化「間の解釈学」の可能性を考える上できわめて有益な参照例である。

日本でフィールドワークを重ねたフランスの地理学者、ベルク(A.Berque)は、西洋の近代以降二項対立的に分断されてきた主体と客体をつなぐ概念として「通態(trajet)」を考え出したが、和辻の「風土」概念こそ、時間と空間、歴史と自然、文化と環境の関係態という意味で、この「通態」概念の先駆をなす。

自然主義的な日本的母型への回帰を意味するかに見える和辻の「風土」概念には、このように人間を自然との「通態」において捉える視点が認められると同時に、私たちが現在グローバルな規模で直面している環境問題において顕著に現れている隘路、すなわち、自然か人間かという近代的二元論のゆえに陥った隘路を切り開くにあたっての重要な手掛かりが認められる。

(5) 最終年度の研究成果は、「人間と自然の身体を介する関係態としての風土」であるが、これは、和辻の唱える「風土」が身体を介する人間と自然の関係態であるという、新しい解釈を提示するものである。このように解釈された「風土」概念から、人間と自然を二項対立的なものとしてとらえ、自然、そして私たちが生きている世界を均質な純粹空間と見なす、西洋の近代哲学、近代科学の孕む問題点が明らかにされる。

ここから、研究課題である「異文化理解に向けての『間の解釈学』の構築」をとらえかえすならば、翻訳の可能性と不可能性にも認められるように、異文化理解のためには、一方で異文化間の解釈枠組みを可能な限りすり合わせる努力と、他方でそれらをすっきり重ね合わせることにできないことの認識とが重要であることが明らかとなっている。つまり、異文化は、水と油のように排斥し合うものでもなければ(そもそも、先にも触れたように、日本文化自体が、江戸時代以前は中国大陆、朝鮮半島から、明治維新以降は、欧米から外来文化を受容することで成り立っている) すっかり同一化されうるものでもない。そもそも違ったものであるからこそ異文化から学ぶことができるのである。それに対して、グローバリゼーションは生活空間の均質化・同一化であり、文化的な特性を希薄化させる傾向をもっている。その意味で、「間の解釈学」はグローバリゼーションとは相容れない。しかし、そうしたグローバル化の時代に特定の風土で生まれ育った人間が、世界に対して貢献することができるのであれば、それは無色透明のグローバル人としてのことではなく、あくまでも「開かれた」という条件付きではあるが、特定の伝統を背負った個性人としてのことであろう。そして、「間の解釈学」もこのような方向性において構築されるに違いあるまい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

星野 勉、人間と自然の身体を介する関係態としての「風土」、法政大学文学部紀要、査読無、巻73、2016/09/30、pp.1-12

星野 勉、グローバリゼーションと風土、法政大学国際日本学研究叢書、査読有、巻24、2015/03/25、pp.41-55

星野 勉、徳川政治体制と朱子学、法政大学国際日本学研究叢書、査読有、巻21、2015/01/30、pp.211-228

星野 勉、無常 - 日本の風土と宗教意識、法政大学国際日本学研究叢書、査読有、巻20、2014/03/31、pp.117-130

星野 勉、和辻哲郎の日本古代文化論における倫理意識の原型、法政大学国際日本学研究所研究報告集『国際日本学』、査読有、巻11、2014/03/31、pp.217-229

[学会発表](計2件)

星野 勉、グローバリゼーションと風土、アルザス国際シンポジウム、アルザス欧州日本学研究所、2014年10月31日、キーンツ

ハイム（フランス）

星野 勉、徳川政治体制と朱子学、アルザス国際シンポジウム、アルザス欧州日本学研究所、2013年11月2日、キーンツハイム（フランス）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

6．研究組織

(1)研究代表者

星野 勉（HOSHINO, Tsutomu）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：90114636